

当院における漢方診療の実際

生殖医療における 柴苓湯使用の意義

恵愛病院生殖医療センター センター長 林博先生

1997年 東京慈恵会医科大学 卒業
同院附属病院
1999年 同院附属柏病院
2001年 厚木市立病院
2002年 富士市立中央病院
2004年 東京慈恵会医科大学附属病院
2011年 恵愛病院生殖医療センター開設、センター長に就任



少子高齢化が急速に進展する昨今、国を挙げての少子化対策の必要性が声高に叫ばれている。埼玉県富士見市で長年、埼玉県および近郊地域の産婦人科・小児科医療に貢献している恵愛病院では、さらに不妊症・不育症で悩む患者さんのための「生殖医療センター」を2011年に開設し、妊娠から分娩、そして出産後の育児までをフォローできる体制を整えている。自らも不妊症・不育症で辛いご経験をお持ちで、「不妊症・不育症を根絶したい」とおっしゃるセンター長の林博先生に、生殖医療における同センターの取り組みと、不妊症・不育症治療における柴苓湯使用の意義について伺いました。

妊娠から分娩・育児までをトータルにサポート

恵愛病院の歴史は、1971年開設の「つるせ産婦人科」に始まります。1983年には医療法人恵愛会恵愛病院が設立され、2004年には現在の地に産婦人科・小児科の専門病院として移転しました。現在では年間の分娩数は約3,000件であり、埼玉県南東部を中心に埼玉県および近隣地区の産婦人科・小児科医療の一翼を担っています。

さらに不妊治療の充実を図ることを目的に、2011年に「生殖医療センター」を恵愛病院と同じ敷地内に開設しました。当センターで妊娠成立後は恵愛病院で引き続き診

療・分娩ができるだけでなく、出産後は小児科がフォローできる体制が完備されていますので、患者さんには安心して受診いただいています。

設備面においては、大きなストレスを抱える患者さんに少しでも居心地の良い空間をご提供できるように、落ち着いた雰囲気演出していますし、患者さんが妊婦さんや赤ちゃんとお接することがないよう、入口も恵愛病院とは完全に分けています。もちろん医療面においても最先端の設備を完備し、高い技術による最高の医療をご提供していると自負しています。

わが国で唯一の生殖医療・内視鏡・周産期医療の専門医

父と兄がともに産婦人科医ということもあり、私も自然と産婦人科の道に進みました。しかし、産婦人科の中でもより医療の幅を広げるために特殊なスキルを身につけたいと考えたことと、生殖医療の専門医であった勤務医時代の上司の影響を受けて、生殖医療を志すようになりました。

生殖医療の最終的な目的は妊娠の成立にとどまらず、元気な赤ちゃんが生まれることです。生殖医療だけでなく周産期医療の修得も必要です。また、以前は子宮内膜症性不妊症の治療は手術療法が第一選択だったので、内視



● 恵愛病院生殖医療センター

鏡・腹腔鏡の技術の習得も必要と考えました。その結果、私はわが国で唯一の生殖医療(生殖医療専門医)、周産期(周産期専門医)、内視鏡(内視鏡技術認定医)の専門医をすべて持っています。

不育症(抗リン脂質抗体症候群)の治療における柴苓湯の意義

以前に勤務していた大学病院では、不育症の原因の一つである抗リン脂質抗体症候群(Anti-phospholipid antibody syndrome: APS)の治療プロトコルに柴苓湯が組み入れられていました。APSに柴苓湯が有効であることは多くのエビデンスからも明らかで、私もその効果を実感し、現在もAPS治療には柴苓湯を低用量アスピリン、場合によってはヘパリンと併用しています。具体的には柴苓湯(8.1g/分2)を、胎児の心拍が確認できる6~7週まで服用していただきます。多くの患者さんに処方していますが、有効率は約8割と高く、重篤な副作用は経験していません。

不育症の患者さんは何回も流産を経験され、長年辛い思いをされていますし、妊娠中は不安を抱えた状態が続きます。それゆえ、出産された時には本当に喜んでいただき、私も感無量です。と言いますのも、私の妻が不妊症であり、APSの不妊症でもあり、体外受精で妊娠しても流産を繰り返し、5回目ようやく子どもを授かることができましたという経験を持つためです。もちろん、妻は柴苓湯を服用していました。

4回目うまくいかなかったときには、妻も私も精神的に大変落ち込んでしまい、“次もダメならあきらめよう”とっていました。ところが、このような気持ちを持つことがかえって良かったのかもしれない。不育症治療には当センターのHPのアドレス*にも用いている“Tender loving care”という考え方があります。これは、不育症の検査と治療に関する欧州のガイドラインの冒頭に記載されている治療法で、不育症の治療には妊娠成立後はメンタル面のケアが重要であることを謳っています。当センターでは、不育症治療には、自らの経験も踏まえてこの考え方を重視しています。

不妊症(多嚢胞性卵巣症候群)の治療と柴苓湯

不妊症の原因の一つに、多嚢胞性卵巣症候群(Polycystic ovary syndrome: PCOS)があります。PCOS治療の第一選択はクロミフェン酸塩ですが、無効な場合も多いためゴナドトロピン療法や手術療法も考慮します。しか



●患愛病院

し、ゴナドトロピン療法は多胎妊娠や卵巣過剰刺激症候群を併発するリスクがあります。

そこで、PCOSに対する有効性のエビデンスが豊富な柴苓湯とクロミフェン酸塩との併用を試みたところ、排卵が認められて妊娠が成立した著効例を経験しました。当センターでは、PCOSに対してクロミフェン酸塩内服の治療から開始し、効果不十分例には柴苓湯を併用することで、PCOSに対する治療効果を高めています。

不妊症治療における漢方治療は、PCOSの治療に用いる柴苓湯がほとんどですが、患者さんのご希望によっては温経湯や当帰芍薬散などの漢方薬を使用しています。漢方薬の服用によって少しでも患者さんの状態が良い方向に向かう可能性があると思いますので、漢方薬の使用も前向きに考えたいと思っています。

また、男性不妊症の治療には補中益気湯や八味地黄丸なども使用しています。

不妊症・不育症の根絶を目指して

当センターの開設当初は私一人ですべての診療にあたっていました。スタッフがより充実してきましたので、さらに多くの不妊症や不育症でお悩みの患者さんに元気な赤ちゃんが授かり、幸せになっていただきたいと思っています。

生殖医療における究極の目標は、不妊症・不育症の根絶です。お子さんを授かることができずに悩む方がいない世界の招来が願いであり、そのためには私も遺伝子解析技術や再生医療も勉強することで、さらに質の高い高度な医療を患者さんにご提供したいと思っています。

*患愛病院生殖医療センター：<http://www.tenderlovingcare.jp>